著者について
今江祥智（いまえ・よしとも）
一九三二年大阪市に生まれる。同志社大学文学部英文科卒業。名古屋で中学校教員生活、東京で編集者生活を送ったあと、京都に帰り聖母女学院短大で児童文学を講じ、現在は著作活動に専念。
著書―「山のむこうは青い海だった」「海の日曜日」「ぼんぼん」「兄貴」「おれたちのおふくろ」「牧歌」「優しさごっこ」「冬の光」など多数、全集「今江祥智の本」（全22巻）がある。

今江祥智（童話）術・物語ができるまで

一九八七年八月二五日発行

著者　今江祥智
発行者　株式会社晶文社
東京都千代田区外神田二-一-一二
電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）
振替東京六-六二七九九

中央精版印刷・牧製本

© 1987 Yoshitomo Imae
Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
〈検印廃止〉　落丁・乱丁本はお取替えいたします。

I313.078
J14

300円 ISBN4-7949-2813-0 C0395 ¥1800E

埼玉県立図書館
11542212

今江祥智〔童話〕術

物語ができるまで

別冊

日常術

晶文社

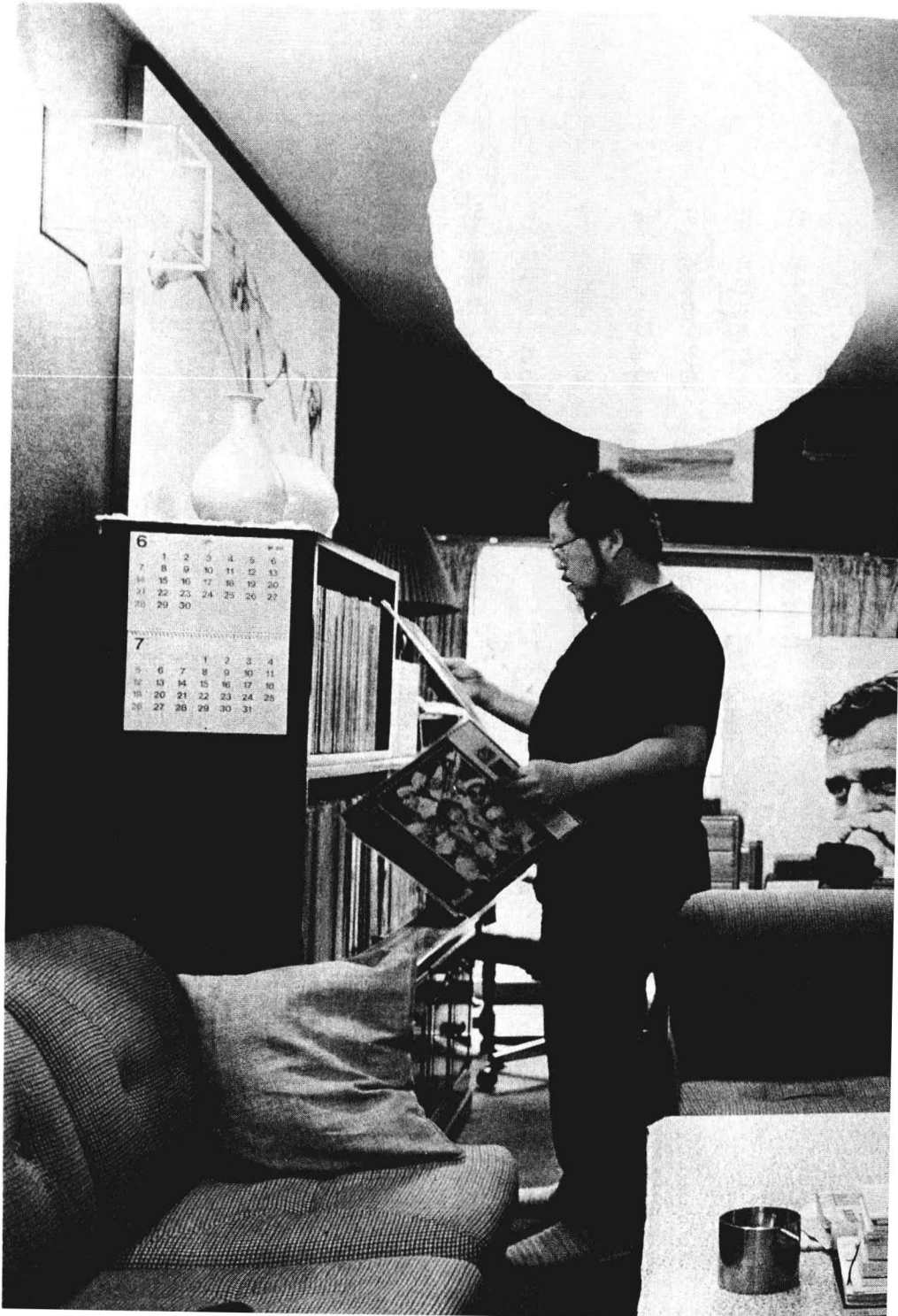
今江祥智〈童話〉術

物語ができるまで

別冊

日常術

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



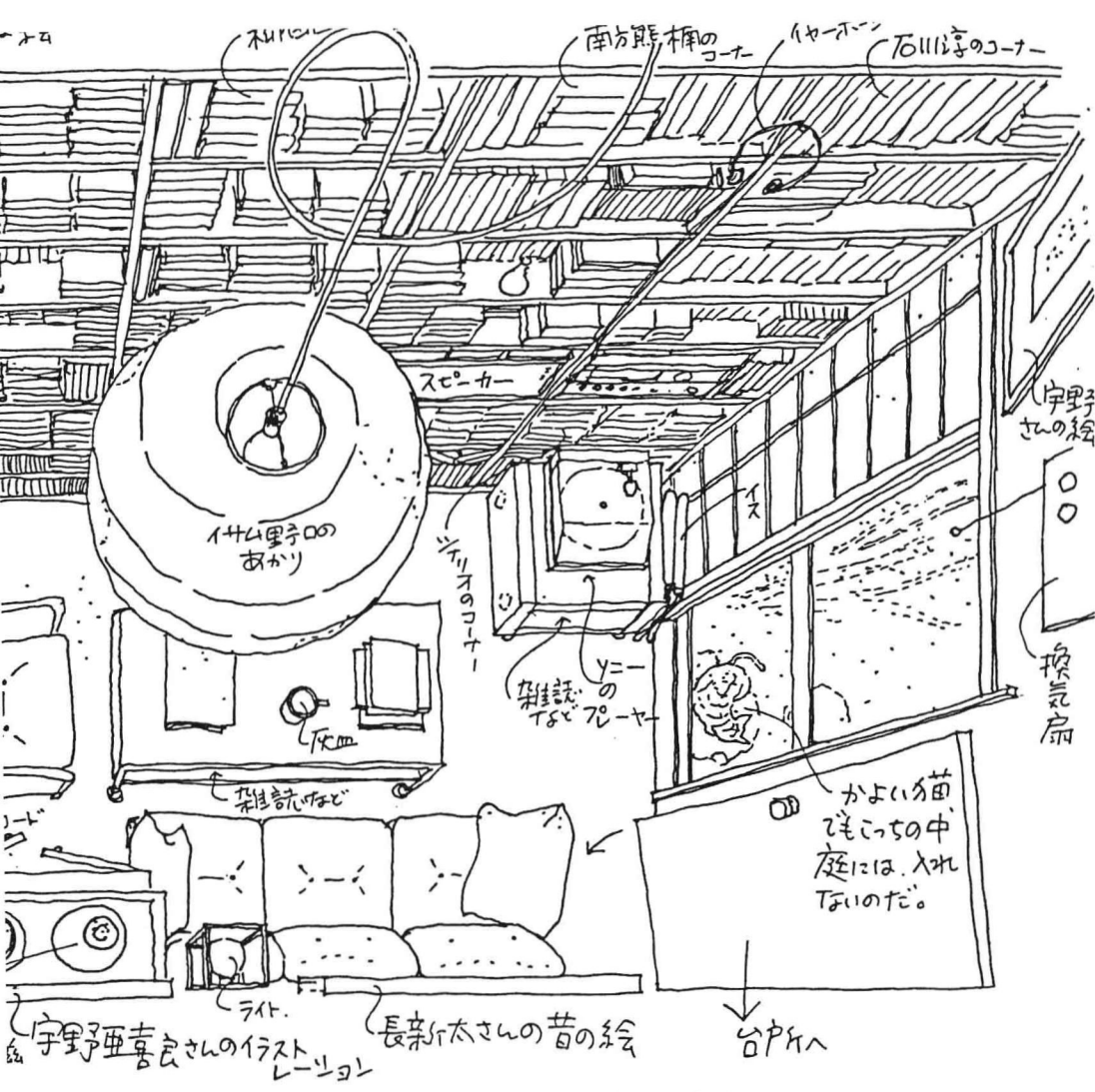
目次

はじめに　8
1　ぼくの部屋　12
2　文房具　21
3　連載と書きおろし　28
4　しごとの手順　38
5　読書法　46
6　読者としての子ども　57
7　文章術　64
8　童話をどう書くか――『稿しまのチョッキ』　105
9　絵本をどう書くか――『ちからたろう』　114
10　自伝的長編をどう書くか――『ぼんぼん』四部作　128
11　時代小説をどう書くか――『写楽暗殺』　138

12 編集者とつきあう 144
13 イラストレーターとつきあう 169
14 ブックトーク 179
15 気ばらしの工夫 188
16 モンタン・コレクション 199
17 本がでたあと 210
わたしのブックリスト 218
おしまいに 225

〈とじこみ付録〉
A 今江祥智 9STORIES 73
B 児童文学通信『I&I』 153

ブックデザイン 平野甲賀
本文レイアウト 藤井礼
写真撮影 太田順一

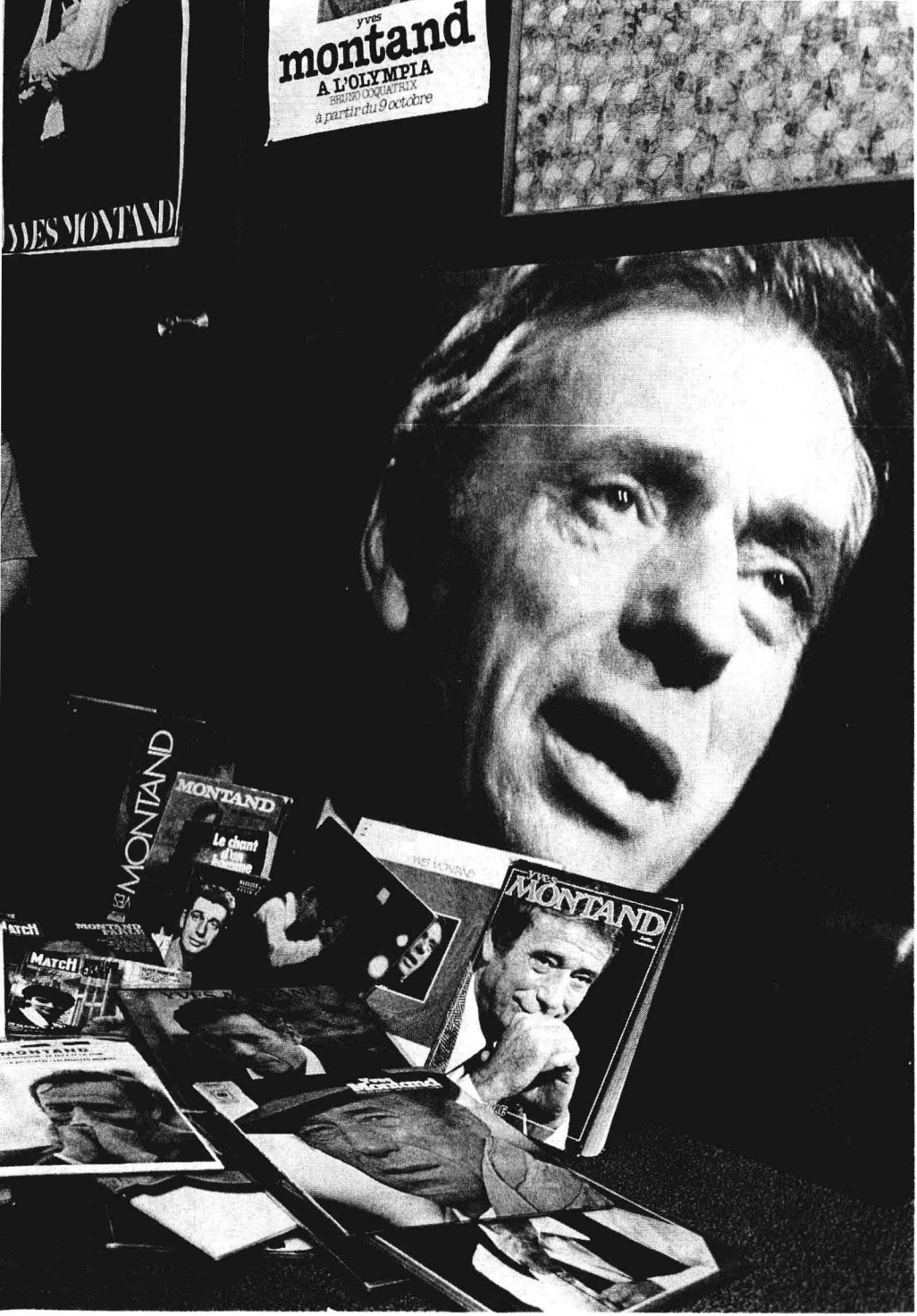


はじめに

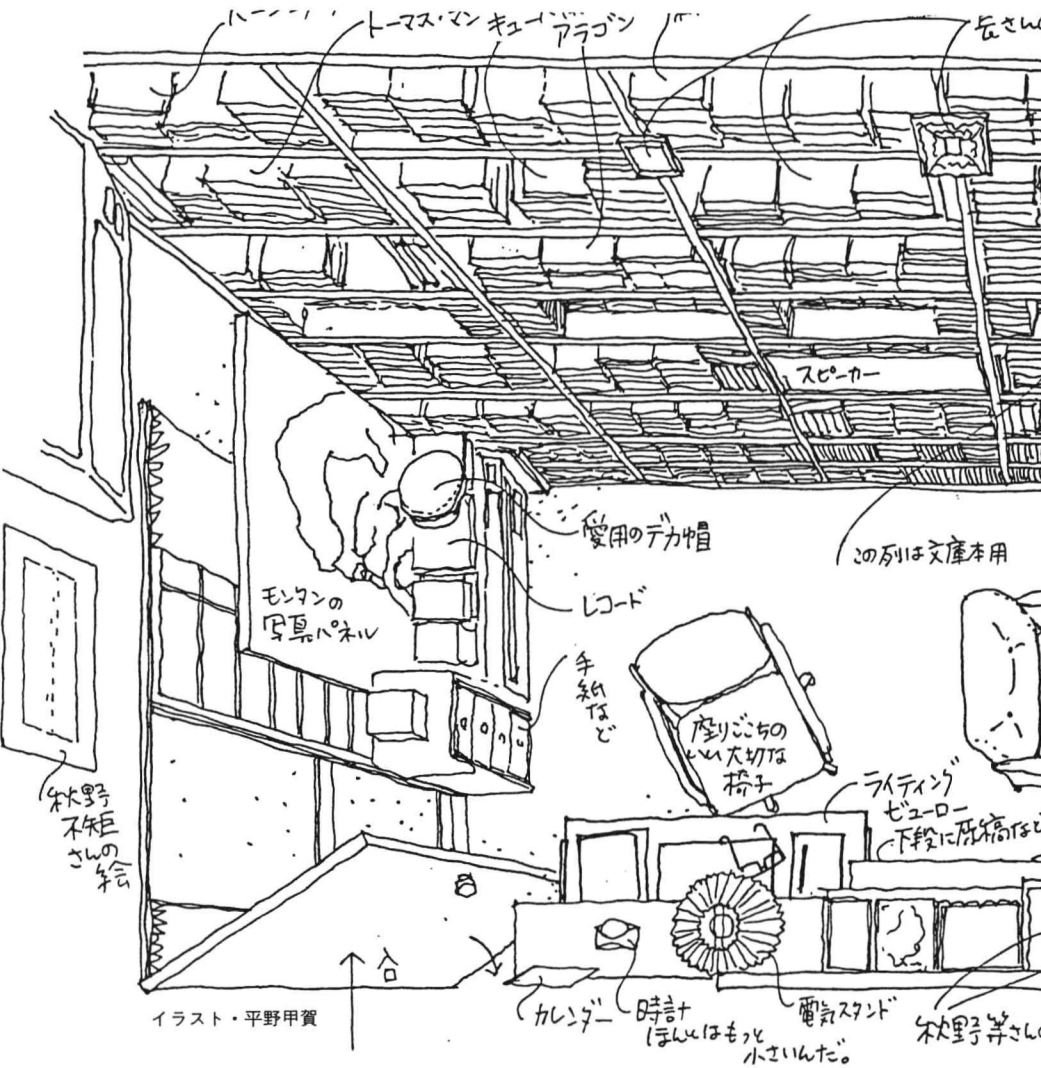
ごらんのように、見事に描きこまれた鳥瞰図がわたしの書斎であります。仕事場であります。この紙の砦にたてこもって、わたしは何百という物語ができるまでにたちあってきました。つきあってきました。

というと少しばかり他人事のようにも聞こえるのかもしれませんが、実際、短い童話やら何百枚という長篇を書くということには、いろんな方法があります。物語の種子が自分の裡に生まれて少しずつ育っていくのを見ている、もう一人の自分に気づくことだってある。そんな自分が必要なときもあります。

そんなときわたしは、子どものこ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



イラスト・平野甲賀

ろ憧れた忍術を思いおこします。目を閉じて指を組み呪文を唱え一心に念じていると、あらあら不思議、霧が湧きおこり雨が降ってくる――みたいに、虚空からバラを摑み出すように、いくつもの物語をつくり出す……。

それならまるで童話術であります。でも、術である以上、柔術同様、稽古稽古稽古の毎日というやり方も必要です。百八手くらいは知らなければやっていけません。そして、そこまでくると逆に、呪文ひとつで――などというのは、お伽噺のようなものということも分ってきます。見えてきます。

その少しばかり見えてきたところをまとめたのがこの本だということになるでしょうか。さて皆さんはここに語られたお伽噺をどう受けとめて下さるでしょうか。

わたしのモンタン・コレクションの
――これだけ集まってくるまでには、やはり30年がかかった。
まるで自室の片隅に臨時開店した「モンタン屋」である。

歌。わがハリ。わが人生。
ヴ・モンタン

1　ぼくの部屋

書斎

——京都北白川のしずかな住宅地。むかいの家の犬の吠え声がかすかに聞こえてきます。玄関をはいったすぐわきの、これ、ふしぎな部屋ですね。新幹線みたいに細長くて、片側がずっと本棚で、両端が窓になってる。

——ウナギの寝床ですなア。ここ本当は車庫なんです。十年まえ、この家に移ってきたときは車庫だったスペース。でも、うちは車を持たへんから、一字だけ変えて、車庫を書庫に改造した。

じつをいうと、最初は二階のひと部屋に大きい仕事机をおいて、そこを書斎にするつもりだったのね。本棚のまえに下に入りきらない本を入れた箱を十数個つめこんだら、気が重くてなにも書けないんですよ。とても原稿なんか書く雰囲気じゃない。

それと、もう一つ、この家にきて六年ぐらいは、まだ子どもだった娘と二人暮らしだったでしょう。すると家事を全部やらないかんわけです。たとえば郵便屋さんがきて「ピンポーン」とベルが鳴ると、そのたびに二階から下りてこなければならない。電話も下だったしね。原稿を書いてるとき、これを繰りかえすとおかしくなる。

で、おのずから下の書庫を書斎として使わざるをえなくなった。ぼくが生まれてはじめて持った書斎です。

――それまでは？

――部屋が三つに台所がついた借家。二階の六畳を自分の部屋にしてた。まわりがぜんぶ本棚で、すみっこに、いま二階にある大きな机をおくと、もうまったく空間がない。ガラス窓をあけると、空と隣りの庭が見える。そういう生活をしてました。もっと若いころ、名古屋や東京で十二畳ぐらいの洋間に下宿してたときのほうが、ずっとゆたかな気分でしたね。

――でも書斎といっても、この部屋は本とレコードでいっぱいですよね。ながい連載をやるときなんか、資料はどこにおくんですか？

――ここらにドドーッと積んどいて、すんだら二階まで、えっちら持って上がるんです。いい運動になります。

――たとえば茶の間で書くなんていうことは……？

――ないです。書くときは、かならずここで書きます。台所は台所。茶の間は茶の間で、本なんか一切おかない。食事をして、酒を飲んで、テレビを見るだけ。

ただ、ぼくは書くのがおそいんです。いざ書きだしたら早いけど、書くまでがとにかくおそいから、よくカンヅメにされる。理論社からだした全集の最終巻に『おれたちのおふくろ』を書きおろしたときは、宝塚ホテルにはじまって、都ホテル、ホテル藤田、最後は東京の山の上ホテルまで、とうとうホテルを五軒ハシゴしました。六〇〇枚。四

本棚の構成は波のように動く。これは1987年６月の本棚。

上段はキューバ革命関係のブロック――最近は反カストロ、反キューバ革命の立場にたつ本がふえてきた。それでもイライラしながら読みつづけている。下はアラゴン。

○日。莫大なお金。それ全部、理論社がもってくれた。

――わア、がんばったなア。

――こっちも生まれてはじめての個人全集だから、最終巻まで、きちんと遅れずに配本して有終の美をかざろうと、がっちりやったの。なにしろ貧乏性やからね、ホテル代が高いから、そのぶん、ものすごいがんばって書けたみたい。ふふふ。

ただね、ホテルでちょっといい部屋をとるでしょう。そうすると机は広いんですが、目のまえに大きな鏡があるんですよ。どんどん書けてるあいだはいいんだけど、なかなか書けずに落ちこんでるとき、フッと顔をあげると、目のまえにひどくくらーい顔がある。で、やむなく鏡に浴衣をかけたりして、もう、めちゃくちゃですよ。

――それにしても、この部屋はとても居心地がいいですね。どうしてなんだろう。

――ひとつは色のせいでしょね。ぜんぶ茶色っぽいから。もうひとつは音ね。この本棚の奥の壁にはコルクが貼ってあるんです。となりの家とわりとくっついてますからね。夜中でも遠慮せずに大きな音をだしたいと思って、コルクを貼った。それで外からも余計な音がはいってこないんですね。

高杉晋作は革命のラッキーボーイだ。かれの関係の本は沢山ある。かなり集めたつもりだけども、「なんだ、こんな本も持ってないのか！」と怒られたら、どうしよう。

本棚

——本棚は作りつけで、小さいブロックに分かれてて、そこに本が二重に並んでる。

——枠の数が五十六あるんです。そのうち二つにはスピーカーがはいってますから、本のぶんが五十四。二重に並べると一つの枠に約一〇〇冊はいるから、ここにあるぶんで五〇〇〇冊——小さいものもあるから、まあ、六〇〇〇冊かな。この半分ぐらいの量を二階においてあって、あと友だちのところにも、やっぱり五〇〇〇冊ぐらいあずかってもらってます。

子どもの本は、ほとんど、ぼくが以前つとめていた大学に寄付しています。はじめはやめるつもりなかったから、どんどん自分の研究室にはこびこんでたわけ。ところが全集をだすことになったり、書きおろしを並行して二冊やらなければならないとか、教授会の時間が長くなるとかで、とうとう両立不可能になって、島式子さんに後任をひきうけてもらった。で、いまは好きなものだけ手もとにおい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com